金大グループ 臨床試験で延命成功

脳腫瘍に新治療法

悪性度が高い脳腫瘍の新たな治療法を、金大医薬保健研究域医学系脳・脊髄機能制御学講座と同大がん研究所腫瘍制御学講座の共同研究グループが18日までに開発した。別の疾患に使われている既存の4種類の薬を組み合わせて投与し、腫瘍の生存、増殖を促進する酵素の働きを抑える。臨床試験では従来の治療法に比べて、患者の生存期間が5～50週長くなり、有効な治療法として期待される。

既存の薬４種で増殖抑制

脳腫瘍は頭蓋骨の内側にできる。このうち、約16％を占める悪性の脳腫瘍「神経膠腫」は、周囲の脳に染み込むように急速に広がるため、手術で腫瘍を摘出しても数カ月から数年で再発することから、新たな治療法が求められている。

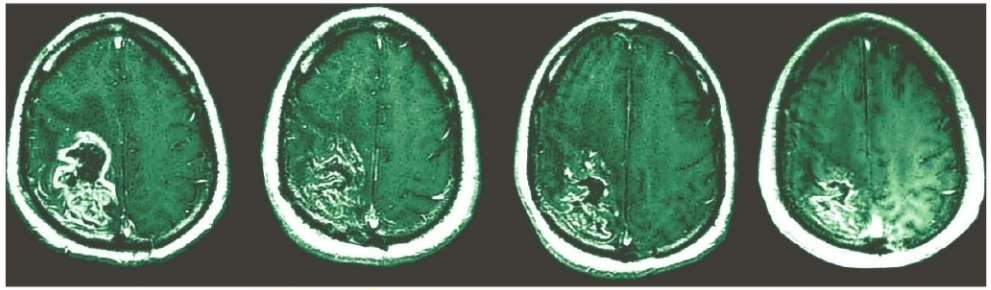
今回は、腫瘍の増殖を促す酵素「ＧＳＫ３β」の働きを阻害すると、腫瘍細胞の増殖が抑制されることに着目。２００９年にこの成果を発表した金大がん研究所の源利成教授の協力を受け、これまで統合失調症や胃潰瘍などの治療に使われていた４種類の薬剤がＧＳＫ３βの働きを阻害することを利用し、脳腫瘍の治療に転用した。

同グループは今年1月から臨床試験を実施。手術や放射線、抗がん剤治療を施した後に再発した患者を対象とし、抗がん剤と併せて４種類の薬剤を投与した。

４人の症例をまとめた中間結果では、頭部のＭＲＩ画像で、患者の病変部が縮小しているか大きくなっていないことが確認された。患者の生存期間は、抗がん剤のみの治療を受けた患者の平均が再発後23・６週なのに対し、新たな治療法では28～73週となった。

今後は、新治療法について県内の関連病院と提携し、さらに臨床試験を進める。また、「ＧＳＫ３β」の抑制に特化した薬剤の開発に向け、製薬会社との協力を目指す。

新たな治療法は特許を出願し、成果は22日から大阪で開かれる第69回日本癌学会学術総会で発表される。研究グループの濵田潤一郎教授と中田光俊講師は「悪性脳腫瘍の患者に希望を与えたい」と話し、源教授は他臓器のがん治療への応用にも意欲を示した。



㊤（左から）再発時、薬剤投与３カ月、６カ月、９カ月のＭＲＩ画像。左下の病変部が徐々に縮小している（金大附属病院脳神経外科提供）

㊦研究を紹介する（右から）濵田教授、源教授、中田講師＝金大附属病院